慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	頓阿句題百首の源泉 : 宋末元初刊の詩選・ 詩話・ 類書との関係を中心に
Sub Title	A study of "Tonna kudai hyakushu (康安元年頓阿句題百首)" (1361) and its sources
Author	小川, 剛生(Ogawa, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.117, (2019. 12) ,p.137- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤道生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01170001-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

頓阿句題百首の源泉

―宋末元初刊の詩選・詩話・類書との関係を中心に

小川　剛生

一、はじめに

南北朝時代中期、和歌四天王の一人頓阿（一二八九～一三七二）が主催した句題百首（以下「頓阿句題百首」とも記す）は、五言の「古詩」の詩句を歌題として詠んだ定数歌である。作歌訓練を意図した、門弟との内々の試みであったと見られるが、長い歌歴を有する頓阿の和歌活動のうちでもユニークな試みであり、また漢詩の一節を題にする、いわゆる「句題和歌」の歴史上にも注目すべき作品である。そのため先行研究の蓄積はあるが、重要な基礎的事項が未解決のまま遺されている。その最たるものは歌題の出典となった原詩が、先学の探索にもかかわらず、依然その七割が明らかになっていないことである。

本稿では、句題の出典をほぼ突き止めることができたのでまずこれを報告し、選定にあたり参照したとおぼしき、刊本として将来された詩選・詩話・類書の利用について述べる。さらに派生する文学史上の諸問題に言及したい。

二、句題和歌の歴史と主要な作品

最初に句題和歌の定義とその歴史について一瞥しておきたい。

句題和歌とは、句題詩と同じく、狭義には漢詩の一句ないし二句を抜き出して、題とする詠法である。[1] もっとも和歌の句題は、古詩の一句であるといっても、適宜文字の改変や圧縮は頻繁に行われていたようで、極端な場合、題に熟語を取り入れた、通常の結題であっても句題と呼ばれた。これらは除外し、古詩のうちに出典を求めた、狭義の句題和歌の主要作品を掲げた（表1）。大江千里の句題和歌を嚆矢として、その後も散発的に行われたが、文学史的に高い価値を持つのは慈円・藤原定家らの試みた文集百首であり、それに先立つ藤原隆房の朗詠百首であろう。

表1　主な句題和歌作品

詠者	作品名	年代	題字	出典
大江千里	句題和歌（千里集）	寛平六 894	七言75五言40	白居易74元稹10上官儀2章孝標2他27
藤原隆房	朗詠百首	建久頃 1190〜1198	七言34五言5他61	和漢朗詠集78新撰朗詠集17他5
藤原定家・慈円	文集百首	建保六 1218	七言54五言46	白居易
土御門院	詠五十首和歌Ⅰ	貞応元 1222	七言	千載佳句（中国作者）
同	詠五十首和歌Ⅱ	貞応二 1223	七言	和漢朗詠集（本邦作者）
源資平	古集十首	文永頃 1264〜1274	七言5五言5	白居易
頓阿ら5人	**句題百首**	**康安元 1361**	**五言**	**？**
三条西実連	五十首詠草（残闕）	長禄元 1457頃	五言	三体詩ほか

良鎮ら20人	竹内僧正家句題歌	長享元 1487	七言	黄山谷詩集巻一「演雅」40
後柏原院ら27人	水無瀬法楽和歌	永正二 1505	五言	白居易
後柏原院ら16人	聖廟法楽和歌	永正三 1506	五言	杜甫
貞敦親王ら	伏見宮家五首歌会	永正七 1510	五言	白居易2蘇軾2黄庭堅1
中院通勝	句題五十首	慶長十 1605	四字題＊	三体詩49李白1

＊七言句24・五言句26、おのおの四字題に圧縮改変。

ところで句題の出典は白氏文集、および千載佳句・和漢朗詠集・新撰朗詠集に求めることが多かった。これは王朝漢文学の好尚に沿うものであるが、室町期には三体詩が現れ、それから李白・杜甫・蘇軾・黄庭堅にも拡大し、むしろこちらが主流となる。また平安・鎌倉期では句題には七言詩が多かったのが、室町期以後は五言詩が目立つようになる。頓阿句題百首は、時期的にも、ちょうどこの分水嶺に位置する。

句題和歌の詠法は最も関心を集めている。はじめは詩句を忠実に翻案していたのが、院政期の結題の詠法は、句題和歌を高度な題詠としてよみこなすことを可能にした。また句題詩の構成上の規則の確立とも連動しつつ、題字の表現に軽重を付け、時に破題的な手法を取ることで、題意をより象徴的に、かつ深く表現することを促したと考えられている。とくに定家の文集百首では、円熟した題詠の処理を看取することができる。ただし、句題の出典となった原詩の内容までも汲んでいるかどうかは、たとえそれが人口に膾炙した詩であっても、考察の余地を残している。

三、頓阿句題百首について　附、新出伝本

それでは、頓阿句題百首について概観したい。本書に言及する著書論攷はかなりあるが、とくに稲田利徳氏と齋藤彰氏に

専論があり、現在の到達点を示している。[2]

成立過程を記す。まず延文五年（一三六〇）二月十六日までに題を定めたらしい。この日、頓阿が右大臣近衛道嗣のもとを訪れて、「五言古詩の句」からなる百題を示した（後深心院関白記）。題の構成について意見を求めたとも、出詠を勧めたとも両様の考えがあるが、一応後者と見られる。

そして康安元年（一三六一）頃、翌々年の新拾遺集下命に先立って、頓阿および良守・良春・頓宗・周嗣の四名が詠み、頓阿が合点した。この四名は、いずれも二条派歌人であるが、歌壇で目立つ人々ではなく、むしろ頓阿その人に深く傾倒する門弟であったとおぼしい。これが「混本人数」[根]であり、その後、石山僧正杲守（洞院公賢男）ら両三人の歌人が詠んで送って来たというが、これは現存しない。

さらに貞治四年（一三六五）閏九月、出詠者の一人である周嗣が「混本人数」[根]たる五人の詠を集成して、「一花抄」と題し、識語に詠作の経緯を記した。これは「一華開五葉」（景徳伝燈録）の語に因むとされている。

現存する諸本は、右の経緯から察せられるように、頓阿単行の百首（内題を「詠百首和歌〈古集五言一句為題〉」とする）と、五人の百首を集成した本（一花抄）と、二種類に大別される。その数はかなり多いが、ほとんどが江戸初期以後の写しである。稲田氏は前者を「頓阿百首」として一四本、後者の「一花抄」は一〇本の伝本を調査され、後者については二類七系となる本文の系統も示された。齋藤氏も前者を「頓阿自筆本系統」として一三本、後者を周嗣書写一花抄本系統として八本を調査され、前者について宮内庁書陵部蔵御所本（目録題「頓阿句題百首」、五〇一・三五七）を底本として翻刻、諸本との異同を掲げられた。ともに本文批判の結果として、相互に異同は多いものの、頓阿百首については前者が優れるとされている。なお一花抄は群書類従巻一七五のほか、彰考館本を底本として新編国歌大観一〇に収録されている。

ついで享受を見ると、頓阿自身は自詠を続草庵集に一〇首採ったが、句題は頓阿の名声により百首題として定着し、天文十一年（一五四二）、三条西公条がこの句題をもって新たに詠じ（称名院句題百首）、元禄八年（一六九五）初刊の草庵和歌集類題にも採られて、小沢蘆庵・加藤千蔭・香川景樹・六人部是香らが試みるなど後世にも多大な影響を与えている。

以上が概観であるが、先行研究で言及されなかった伝本がその後も見出されている。ここでは享受史上重要な二本に触れたい。

まず、川越市立中央図書館蔵続草庵和歌集[3]は、全文が三浦義同（一四五一～一五一六）自筆で、頓阿単行の句題百首が合写されている（六五ウ～七三ウ）。義同は法名導寸、扇谷上杉氏一門の名将で、相模新井城主であった。この本は続草庵集の最古写本にして最善本であるが、頓阿の句題百首としても現存最古の写本の一つである。

ついで、冷泉家時雨亭文庫蔵詠二十首倭歌は、一花抄の抜書本である。後光厳天皇（一三三八～七四）筆と伝えられるが、室町中期頃の書写と見られる。

内容は、二十首すべて五言詩の句題である。うち十一首が題・歌とも一花抄と一致、四首が題は一致するが和歌は異なり、五首が題・和歌とも一致しない。その独自の五首の題は三体詩を出典とする[4]。すると誰かが一花抄を抜書した上で、四題は新たに詠じ、また三体詩による句題和歌作品を併せて、二十首に仕立てたことになる。

ところで、この出典未詳の和歌九首のうち二首が三条西実連（一四四二～五八）の詠草に見え（一七〇・一七一）、表1に掲げた詠草五十首（実連自筆で「五十首詠草　古集五言一句為題」と題する）の一部らしい。詠二十首倭歌は、不思議な伝本であるが、初学期の実連がさまざまな句題による詠作を試みたものと一応考えられる（ただ筆跡は実連とは異なるので転写であろう）。句題和歌の享受史上注意され、三条西家との係わりも注意される。実連は実隆の夭折した兄であり、公条の伯父である。

四、句題の出典

頓阿句題百首で遺された最大の課題は、句題の出典が明らかではないことであろう。

これについて稲田氏は、この句題は、過去の句題和歌とは重ならない独自のもので、出典となった詩集として白氏文集・李太白詩集・杜少陵詩集・王右丞相詩集・宋詩別裁集・三体詩などを挙げられた。齋藤氏も司空表聖詩集などを新たに指摘

されたが、あわせても三〇題ほどしか明らかではなかった。ただ、特定の詩人や詩集ではなく、唐宋の詩から広く求めたらしいことが推測できる。

唐詩には古くから唐詩類苑・全唐詩など集成の試みがあったが、宋詩についても近年全宋詩（北京大学古文献研究所編）および全宋詩輯補（湯華泉輯撰）が周備し、その恩恵に預かることができるようになった。調査した結果、一〇〇の句題のうち、九九題までを確認することができた[5]。

しかし、ある総集・別集に載せる詩に、たとえ句題と同一の句を見出したとしても、その詩から採ったとただちに断定できないことはもちろんである。とりわけ全宋詩に収める詩は二五万首という夥しい量であるから、複数の詩に同じ句が見えることも多い。また偶合の可能性もある。

これについても、稲田氏が、いかに頓阿といえども、これらの詩句を各々の原出典に直接当って抜書することは非現実的であり、南宋末期成立の詩話集成である詩人玉屑に一九題が見出せることを指摘した上で、こうした「漢詩句を類聚した、コンパクトな書籍に依拠した」のではないか、と推測されたのは示唆的である。

そこで頓阿が嘱目し得たと思われる、およそ宋末～元初刊行の、唐宋の五言詩を収める詩選・詩話・類書を調査した（詳しくは末尾の表2）。各書に見出される句題の数は以下の通りとなる。

分門纂類唐宋時賢千家詩選（伝劉克荘撰、唐宋詩を分類、宋末刊）―五五（ないし五六）[6]題。

錦繡万花谷（宋佚名撰、類書、淳熙十五年1188序刊）―二五題。

詩人玉屑（宋魏慶之撰、両宋詩話の集成、淳祐四年1244序刊）―二三題。

詩話総亀（宋阮閱撰、宋代詩話の集成、紹興三十一年1162刊）―一五題。

古今合璧事類備要（宋謝維新撰、類書、宝祐五年1257序刊）―一五題。

瀛奎律髄（元方回撰、唐宋の律詩を分類、至元二十年1283序）―一一題。

苕渓漁隠叢話（宋胡仔撰、宋代詩話を集成分類、紹興四年1134序刊）―九題。

三体詩（宋周弼撰、唐宋の七絶・五律・七律の詩選、淳祐十年1250序、宋末刊）――六題。

当然ながら所収の詩は相互に重複するものの、分門纂類唐宋時賢千家詩選（以下、「千家詩選」とする）が突出して多く、錦繡万花谷・詩人玉屑がそれに次ぐ。そして実にこの三書で、九一題を求めることができるのである。[7] そして以下に述べる理由で、その他の書は必ずしも参看を要しないが、この三書、とくに千家詩選・錦繡萬花谷は確実に参看して句題を選択したものと考えられる。

まず、句題の源泉たる詩には、全宋詩さえ他書に見出せず、これらのいずれかによってしか知られないものがかなりある。とりわけ千家詩選にしか見出せない詩は二〇題にも上るのである。

ついで、源泉とおぼしき詩が、各詩人の別集をはじめ複数の収録文献間で文字の異同がある場合、句題はこれらの三書に採られた本文と一致することが非常に多い。

いくつか挙例すれば、1の「遥峰帯晩霞」は、南宋の劉克荘の五律「暝色」、「暝色千村靜、**遥峯帯浅霞**（晩）、荷鋤歸別墅、乞火到鄰家、踈鼓聞更遠、昏燈見字斜、小窓風露冷、白起灌蘭花、」の第二句を採る。その別集後村居士詩や元の方回撰の瀛奎律髄に対し、千家詩選だけは「晩霞」とする（図1）。また同じく91「清渓照孤影」も、南宋の戴復古の五律「山中小憩」、「地僻人稀到、山寒水欲氷、聞鐘知有寺、見犬不逢僧、断壟森喬木、頽簷掛古藤、**斜陽照孤影**（清渓）、詩骨瘦崚嶒、」による。この詩からは45「山寒水欲氷」、13「頽檐掛古藤」も採られており、出典であることは疑いないが、91は「清渓」と「斜陽」の異同がある。しかし千家詩選だけが「清渓」とするのである。

そして受容史を辿れば、詩人玉屑はもとより、[8] 他二書も成立後まもなく本邦に将来され、鎌倉末期から南北朝期にかけて広範に利用されたことが確かめられる。この点は後述したい。

以上の結果を受けて、句題となった原詩の傾向について、さらにつぎの点が言える。

まず、唐宋の五言詩から広く選んでいることが確実になる。作者は判明した限りで六六人に上り、盛唐の張軫・孟浩然から南宋末期の戴復古・劉克荘まで五〇〇年間に亘っている。唐宋の間に際立った偏りはないが（唐三〇人、北宋一八人、南

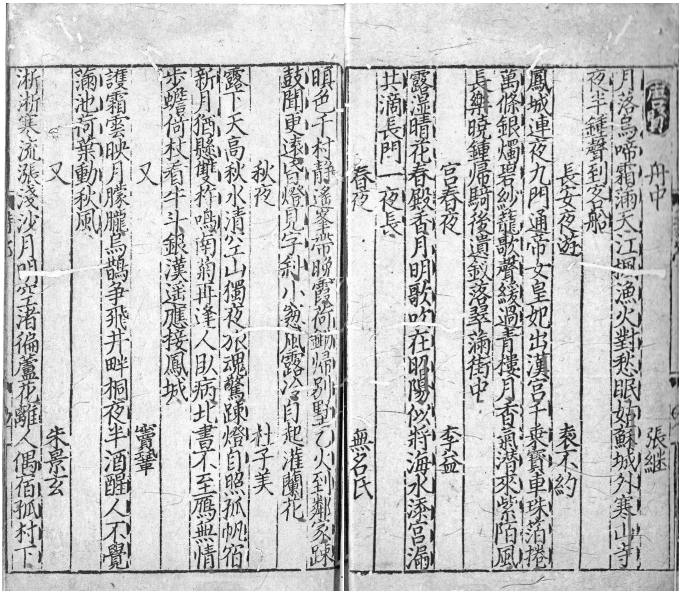

図１　分門纂類唐宋時賢千家詩選（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵）巻六・昼夜門・夜・「春夜」。１の句題の出典。唐賢・無名氏とあるが実は劉克莊の作。

宋一八人）、晩唐と南宋にやや比重があり、句題百首の詠作年代から見れば、近代と称してもさしつかえない詩人の作を採用していることが分かる。

また詩体では、唐代以後の近体詩が大多数を占め、五言絶句が二九首、五言律詩五八首となっている。これも南宋に晩唐体が風靡し、五言律詩を重要視した傾向と連動する。なお、二首だけ七言詩によると思われる句題がある。[9]

ところで、頓阿句題百首のほとんどの伝本には「古集五言一句為題」と注記があり、あるいは後深心院関白記にも「以五言古詩句為百首題」とあった。頓阿もその周囲も当初から「古集」「古詩」と認識していて、時代意識を持たずに詩を選定したことになる。これは唐宋詩を広く蒐集した三書、とりわけ千家詩選に依存した結果とすれば一応は理解できる。いっぽうで南宋末期に活動した、いわゆる江湖派詩人の戴復古が一三題、同じく潘牥が六題を採られていることは注目すべきであろう。さらに室町期には絶大な人気を博す蘇軾・黄庭堅の作からは採られていないことも併せて後考したい。

出典となった詩が明らかになったことで、句題の校訂

にも資するところがある。88「天色無情談」は、諸本間で異同は認められないが、実は「天色無情淡」とすべきである。[10] さらに一花抄の20「風樹咽鳴蟬（鳴蟬咽）」、25「蛍入定僧衣（袖）」、81「半山帯夕陽（無）」、98「鷺立斜陽天（去）」は、単行百首との間にそれぞれ傍書したような字句の異同がある。[11] 出典の詩を参照すれば、20・25は一花抄の、81・98は単行百首の形が正しい。けっきょく両系統が相互に校合を必要としていることも分かって来るのである。

五、出典から見た和歌表現（一）―錦繡萬花谷の歌題集成書としての扱い

ここで重要な出典である錦繡萬花谷について詳しく触れたい。淳熙十五年（一一八八）自序を持つ、編者未詳の巨大な類書であり、前集・後集・続集各四〇巻と後人の手になる別集三〇巻からなる。「その豊富な内容は却って煩瑣に失し、體例が雑然としていると非難を受ける缺點もあるが、博引された文獻の中に佚詩佚文が少なからず見られる點は甚だ重要視されている」[12]と言われる。伝存する最古の完本は明嘉靖十五年刊本まで降るが、早く宋元間に数種が刊行されて流布したようで、本邦にもいずれも数冊の零本ながら宋刊本が八ヶ所に現存する。うち龍潭寺（静岡県浜松市）蔵本と静嘉堂文庫蔵本は金沢文庫旧蔵本の僚冊であり、版種は中国国家図書館蔵本〔宋末〕刊本（存四十四冊）に先行する。

後出の古今事文類聚ないし韻府群玉といった、分類により配慮の行き届いた韻類書の将来によってその座を明け渡すが、鎌倉期にはそれなりに重視された類書であったとおぼしい。

この書に二五題を見出すことができるが、所在はかなり偏る。巻と部の内訳を示すと、前集巻三・春（一）、夏（二）、秋（一六）、冬（一）。後集巻二・雪（一）、巻二十一・隠逸（二）、巻二十八・僧（一）、寺院（一）と、前集巻三、しかも秋部にほとんど集中しているのである。

その秋部を見ると、「梧桐自語」「秋欄」「青女」「鵲起」「登慈恩浮圖」以下一〇項を立て、それぞれに属する詩文の一節を掲げる。たしかに立項は体系的ではないが、さらに雑然とした印象を受けるのは、この後の「詩」項である。ここには要するに「秋」をテーマとした五言詩・七言詩を計一九七首を、わずかに作者名を注するだけで、改行もせず四丁にわたり列

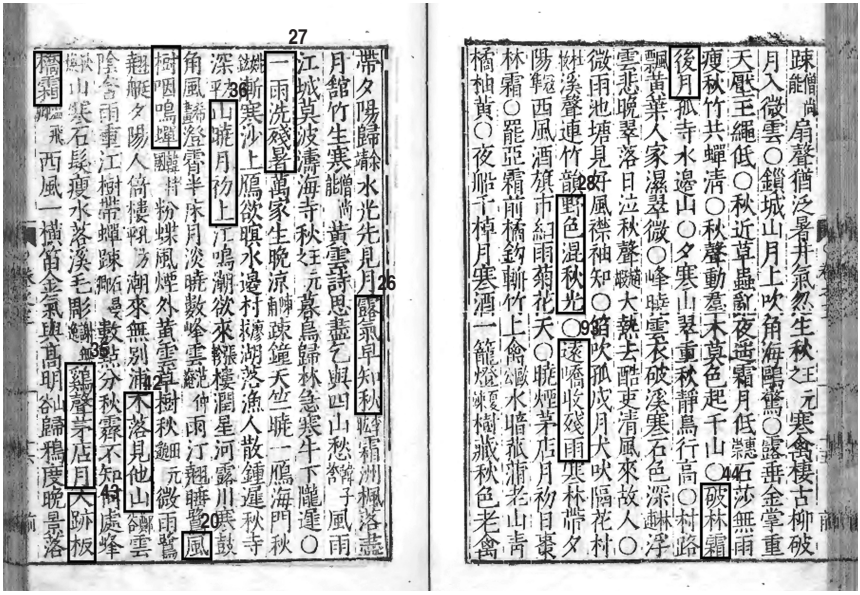

図２　錦繡萬花谷前集（国立公文書館蔵林家旧蔵本）巻三・秋・詩より

挙する。その詩の出典を調べてみると、やはり唐宋に限られており、はじめは詩全句を掲げるが、すぐに律詩・古詩では四句を挙げるのみとなり（首聯と尾聯を略する）、三三首目より一〇二首目までは七言詩より二句、一〇三首より一九七首は五言詩より二句の、それぞれ摘句だけを掲げる。排列にはこれ以上の規則もないようで、はなはだ雑然とした印象を与えるが、しかし図２に示したように、頓阿句題百首が取材したのは、この五言の摘句の箇所であったとおぼしい。類書としては不便であるが、しかしこの印面は本邦で既に行われていた、明題部類抄以下の歌題集成書の形式に近く、五字の句題を採取することはかえって容易であったと思われる。

このことは歌人が句題をどのように表現していたか、という問題を考える視座を与える。これについては既に、「歌人たちは、必ずしも、原詩の中の一句の心情や光景に拘泥していない。それは、原漢詩全体を把握していないためもあろうが、原詩句の世界から一歩でて、新しい発想や心情を盛り込もうとしたためかもしれない」[13]、また「句題が原詩の主題や原詩の表現とは切り離されて、単なる題として扱われるという傾向と無関係ではない」[14]といった指摘が

ある。総じて歌題（結題）としてとらえ、原詩をかなり大胆に和歌的世界のうちに翻案する傾向が強かったと言われる。原詩やその作者がほぼ全て明らかになっても、この指摘は依然有効である。つまりこのような形式の類書に拠っているとすれば、原詩の内容は、そもそも句題の採取の段階で、無関係であったことになるからである。

六、出典から見た和歌表現（二）―分門纂類唐宋時賢千家詩選所載原詩との関係

前章で述べた事柄を、引き続いて千家詩選に掲載された詩による句題に即して考えてみたい。そこで成立と伝来を詳しく述べる。[15]

構成は初刊と目される二十二巻本で時令・節候・気候・昼夜・百花・竹林・天文・地理・宮室・器用・音楽・禽獣・昆蟲・人品の計一四門を立て、各門を部類し、それぞれ唐賢・宋賢・時賢の別に（宋賢・時賢の区別ははっきりしない）、唐と両宋の五言詩・七言詩、総計一三〇〇首弱を掲げている。類書的用途を目指した編纂であることが歴然としている。「千家詩」と題する詩選は多数あるが、その最初のものと目される。

編者は劉克荘とされるが、早く本書を手にした虎関師錬が疑ったように（済北集・巻十一詩話）、劉克荘の名を騙った、坊間の出版物と考えられる。しかし本邦での流布は広範であり、唐宋詩に接する人がしばしば繙いたようで、[16]その勢いは室町末期に及んだ。

版種は大別して二系統ある。二十二巻本が初刊と見られ、宋末元初刊とされる成簣堂文庫蔵本（巻十三～十六鈔本にて補配）があり、清の棟亭十二種刊本は同版本の覆刊である。さらに天保九年官板がこれを底本とした。なお、応永九年（一四〇二）本奥書を有する龍谷大学附属図書館蔵室町末期写本（西本願寺旧蔵、十一冊）は、各詩に仮名注を施すが、やはりこの系統に属する。この仮名注は平易に作意を説いており、南北朝期の理解を知ることができる。中国国家図書館蔵〔明〕鈔本四冊は、二十二巻本に洩れた詩篇を補ったとおぼしく、巻二十三は続いて人品門、二十四は宴賞門、二十五は性適門を立て、さらに残葉五丁に、巻不明の「宮怨」「閨怨」の部を載せている。

三十巻本は二十二巻本のうち一巻から二十巻を前集とし、後集十巻を増修したものである。やはり南宋末期、理宗朝刊と見られる、周防國清寺旧蔵本が孤本で、北京大学図書館蔵と慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本に分蔵される。

頓阿句題百首は二十二巻本の系統に拠ったと考えられるが、やはり出典を求めた詩は偏在しており、巻十四の「山」部所載の詩に一一題、「郊野」に三題、巻十五の「江」に五題、「湖」に一題、「渓」に四題、「舟」に五題と、この両巻を宛てた「地理門」に集中している。いっぽう現在、明抄本によって不完全な形でしか伝えられない、巻二十五・性適門には計六題、そして巻不明の「閨怨」詩からも三題を取材している。千家詩選の需要は当時かなり高かったと思われるから、現在では知られていない異版が行われていて、それに拠ったものではないか。すると、さらに多くの句題を本書に求めていた可能性も高い。

このように頓阿句題百首は、間接的ながら千家詩選の伝来にも示唆を与えるのであるが、ここで、本書所載の詩の内容と、句題和歌の表現との関係についても考えてみたい。

84「流水浸雲根」は、戴復古の五律「道傍館」に取材する。原詩は農村での安らかな生活の一齣を描くもの。

道傍誰氏舘、借我坐開樽、翁嫗出迎客、兒童為掃門、好花生竹所、流水浸雲根、儻遂ト隣約、為農老此村、（道傍誰氏の舘ぞ、我に借りて坐して樽を開かしむ、翁嫗は出で客を迎ふ、兒童は為に門を掃ふ、好花竹所に生じ、流水雲根を浸す、なを隣をトする約を遂げて、農と為り此の村に老いん、）

この詩は千家詩選巻十六にも収められているから、龍谷大学図書館蔵本の仮名注を参照すると、

館舎ハ凡ハ公館トテ非ニ私ノ居所一、但如ク亭子等ノ、公私通用モ可レ有レ之、此詩ハ私ノ人ノ山庄ト見、翁嫗ハ老女也、守テ此館ヲ一ヰタル女ト覚ユ、児童モ此僕トヲホヘタリ、竹邊ニ有花、又流水巡ニ石根ヲ、是ヲ云ニ雲根ト一、此地尤堪リルニ三ト一ニ隣ヲ故ニ約シテ此主ニ一、吾モ若帰休シテ成テハ二農夫ト一、住セムトニ此村ニ一也、

とあるごとく、「雲根」とは岩といっても庭石のことで、「流水」も農家の敷地内にあるささやかな流れであることは明らかである。ところが、頓阿ら歌人は、この句題を、原詩の世界とはまったく無関係に詠んでいる（一花抄四一六～二〇）。

風越や谷に夕ゐる白雲の中にぞ落つる木曾の山川　　頓阿
きえぬとも誰かはしらん雲かかる山のいはねの水のうたかた　　良守
よとともに雲ぞかかれる石間行く水のみなかみ音ばかりして　　良春
雲の波猶立ちそひて水上は峰より落つるやまの滝つ瀬　　頓宗
たえだえにすゑはながれて行く水の浪かとみればかかる白雲　　周嗣

たとえば頓阿は、信濃国の歌枕である風越の峰（現長野県飯田市）を詠んでいる。これは「風越の峰の上にて見る時は雲は麓のものにぞありける」（詞花集・雑下・三八九、家経）あるいは「風越を夕越え来ればほととぎすふもとの雲の底になくなり」（千載集・夏・一五八、清輔）という中古の作例があるように、雲を遙かに見下ろす高峰であり、そこに山川がどうどうと落ちて行く、壮大な風景としてとらえていた。他の四人も深山渓谷を詠む。句題が原詩とは無関係の、結題として処理されていることは明らかであろう。

七、江湖派詩人との関係

以上、頓阿句題百首の題の選定に直接参照された書物を検すると、句題は、原詩の世界とはほぼ無関係に、あくまで結題として詠んでいたことが複数の方向から確かめられた。この句題百首では、三題を採られた詩が三首、二題を採られた詩が九首ある。[17] これらの詩への注目は認めてよいであろうが、同じ詩から採った句題でも、それぞれ全く異なる部立に配属させているから、原詩と切り離されていたことが明らかである。但し、だからといって、句題の出典となった原詩の作者にまったく無頓着であったとは言い切れない。

それは南宋末期に大いに活動した、いわゆる「永嘉の四霊」の二人徐照・趙師秀、論客で滄浪詩話を遺した厳羽、そして江湖派の重鎮劉克荘らの詩があるばかりか、さらに同派を代表する戴復古・潘牓の詩を重視したことである。戴復古は仕官せず各地を遍歴し、売詩売文をもって生活したが、その穏やかながら卑屈さのない詩風は高く評価されていた。いっぽう潘

牓は、仕官はしたものの志を得ず早世し、劉克荘が墓誌銘を書いている（後村先生大全集巻一五二）。ともに千家詩選が重視する作者であるが、戴復古の場合、現存する千家詩選には見えない詩からも採っており、江湖小集に収められた別集を直接参照していた可能性もある。本邦における受容としては極めて早く、それだけでも重要である。

この江湖派とは南宋末期に活動した、下層の士大夫や官位を持たない群小詩人のグループの称である。「江湖」は官界に対する民間を意味する。その詩風は日常卑近な題材を穏やかに詠むもので、黄庭堅ら江西詩派を敬遠する一方、永嘉の四霊に倣って、淡泊な晩唐詩を熱愛した。[18]

また首都臨安の棚北大街睦親坊に陳宅書籍舗を構えた、書商陳起のプロデュースによって、晩唐・江湖詩人の小詩集が陸続と出版され、作詩人口の拡がりに一役買ったことも特色である。[19] さらに詩人玉屑は江湖派に属する詩人魏慶之の、三体詩は同じく周弼の編纂で、いずれも作詩の手引きとして刊行されたものである。劉克荘の名を騙った千家詩選もそこに含めてよい。本邦の鎌倉末期から南北朝期の歌人は、江湖派の出版活動を通して、唐宋の詩作や詩論に触れるところが大きかったことになる。詩論に学んで連歌論を大成した二条良基はその一人であり、[20] 良基に庇護されていた頓阿も同様であろう。すると、句題和歌が蘇軾・黄庭堅の詩からは一題も採っていないことは恐らく偶然ではない。

句題の原詩を選定したのは頓阿の所為として疑われることはなかったが、拠った源泉が明らかになれば再考の余地が生ずる。こうした刊行物を最も敏感に受け止め得たのは、むしろ禅僧であろうと推測される。

その候補となるのは句題百首の「混本人数」[22]であった周嗣である。勅撰作者部類・凡僧部に「禅僧」と明記されているが、禅林官寺での地位は持たなかったようで、頓阿のため歌書を書写したり提供することに励み、「蔵書家周嗣」とも評された。[21] ならば、このような新渡の刊本を提供し、句題の選定の手助けをするのに、周嗣ほどの適任者はいない。一花抄をまとめたことも、彼がこの企画の推進役であったとすれば頷けるのである。原詩の選択にもその好尚が反映されているのではないか。

ところで、周嗣は「江湖」と号した。後鳥羽院御口伝（静嘉堂文庫蔵本ほか）の貞和六（観応元）年（一三五〇）十一月

の本奥書に「江湖周嗣判」と署名している。この場合の「江湖」とは禅の修行者の号であろうが、官寺に住さず、民間で生活する修行者という自意識に因むものであろう。

そして貞治二年（一三六三）の愚問賢注の跋では、頓阿もみずから「江湖斗藪之日、嘯羈中之風光、山林閑居之時、翫塵外之景色」と述べ、同じように「江湖」の語で作歌活動の場を回顧しているのは、「山林」と対になる文飾とはいえ、気になるところである。

思えば、頓阿も地位や係累を捨て、精進を重ねて公武の権力者に出入りし、野に在りながらも遂に歌壇で最高の名声を博した歌人である。周囲がその文学活動を、戴復古のような江湖派詩人と重ねる思考があったとしても不思議ではないのである。

八、おわりに

もちろん、頓阿とその周辺が戴復古への関心を持ち、その詩に共感を覚えていたとしても、句題和歌にはその作詩の精神が生かされていないこともまた事実である。真実、詩の内容に共感して、「江湖」での生活を実践するのは江戸後期の市河寛斎（一七四九～一八二〇）の江湖詩社まで降るのであろう。

だからといって、室町期の受容が浅薄な、取るに足らないものであったとするのも不当であろう。詩選・詩話の刊本から受けた影響の度は、現代人の想像するより、はるかに早く深かった。それは彼土の思想文物の消化、受容や摂取という視点だけでは解けない面もある。つまり本邦の文学者にも、自己の問題として受け止める下地が育っていたからであろう。こうした時、その知識はまずは無責任なアナロジーの形で現れがちであるが、江湖派詩人の、閑居を憧憬しつつ、身軽な立場を生かして権力者に詩文を献じて生活の資とした、いわゆる「謁客」[22]という活動を知れば、たとえば頓阿や兼好のごとき遁世歌人が自らの生き方を思って顧みることがなかったとは、かえって考えにくいのである。

本稿は頓阿句題百首についていちおう問題解決をしたが、彼我の遁世した文学者の自意識という、大きな論点が生じてき

た。しかし与えられた紙数も尽きた。後日を期したい。

註

(1) 近年の論著を中心に挙げる。鈴木健一『近世堂上歌壇の研究』(汲古書院、一九九六年)第三章二「中院通勝〈句題五十首〉論」(初出一九九四年)、佐藤恒雄『藤原定家研究』(風間書房、二〇〇一年)第五章第二・三節「建保六年「文集百首」の成立」「『文集百首』の慈円と定家」(初出一九七五・八七年)、本間洋一『王朝漢文学表現論考』(和泉書院　二〇〇二年)「句題和歌の世界」(初出一九九二年)、佐藤道生『句題詩論考　王朝漢詩とは何ぞや』(勉誠出版、二〇一六年)8「平安後期の題詠と句題詩—その構成方法に関する比較考察」(初出二〇〇五年)、小山順子a「室町時代の句題和歌—永正三年五月四日杜甫句題五十首について」(大取一馬編『中世の文学と学問』龍谷大学仏教文化研究叢書15、二〇〇五年)、加畠吉春「和歌の題詠における「句題」の概念を巡って」(早稲田大学古代文学比較文学研究所編『日本・中国交流の諸相』アジア遊学別冊3、勉誠出版、二〇〇六年)、小山順子b「室町時代の句題和歌—黄山谷「演雅」と『竹内僧正家句題歌』」(国語国文76-1、二〇〇七年一月)、小山順子c「室町時代の句題和歌と三条西実隆」(大取一馬編『中世の文学と思想』龍谷大学仏教文化研究叢書24、二〇〇八年)、錺武彦『鎌倉時代中後期和歌の研究』(新典社、二〇一二年)「『資平集』の「古集」十首について—源資平の『白氏文集』受容」(初出二〇〇九年)、岩井宏子「土御門院の句題和歌」(大取一馬編『日本文学とその周辺』龍谷大学仏教文化研究叢書33、二〇一四年)。

(2) 石田吉貞『頓阿・慶運』(三省堂、一九四三年)。井上宗雄『中世歌壇史の研究　南北朝期』(明治書院、一九六五年〔改訂新版、一九八七年〕)。稲田利徳『和歌四天王の研究』(笠間書院、一九九九年)第五章第二節「『句題百首』(一花抄)の諸本と成立」(初出一九八六年)。齋藤彰「句題百首考(一)～(八)」(学苑557、560、563、565、577、585、590、602　一九八六年五月～九〇年一月)。

(3) 小川剛生「三浦道寸筆『続草庵和歌集』」(三浦一族研究22、二〇一八年三月)参照。

(4) 冷泉家時雨亭叢書75『中世私家集　十二』(朝日新聞社、二〇〇八年)「解題」(井上宗雄・浅田徹執筆)参照。

(5) **94**「落日沈沙頭」はいまのところ出典となる詩を探し得ていない。

(6) **72**「盡日掩柴扉」が千家詩選巻二一・人品門にのみ見える儲泳の五律「盡日掩柴門、何人得見君、只因喧寂異、似有聖凡分、瀑

近夜疑雨、山深晴亦雲、傳聞九霄翮、落羽正紛紛」に拠る可能性もある。この詩からは**97**「瀑近夜疑雨」も採られているからである。

(7) 残り九題の詩は、白氏文集（白居易）に載るもの3、石屏詩集（戴復古）3、劒南詩稿（陸游）1、三体詩1、不明1となる。但し、これらの詩は他文献にも見えるので、必ずしもここに挙げた書に拠ったと見るを要しない。

(8) 太田青丘『日本歌学と中国詩学』（太田青丘著作集1、桜楓社、一九八八年。原著は一九五八年）、張健（會谷佳光訳）「魏慶之と『詩人玉屑』」（橄欖12、二〇〇四年九月）、住吉朋彦「『詩人玉屑』版本考」（斯道文庫論集47、二〇一三年二月）参照。

(9) 5「清月上梅花」は、同一の句を北宋の曹勛の五律「山居雑詩九十首　其三十六」のうちに見出すが（松隠集巻二七）、本邦での受容は定かではなく、むしろ釈恵洪の七律「上元宿百丈」、「上元独宿寒巌寺、臥看篝燈映薄紗、夜久雪猿啼嶽頂、夢回清月在上梅花、十分春瘦緣何事、一掬帰心未到家、卻憶少年行楽処、軟紅香霧噴京華、」の第四句を採って、上二字を削ったのであろう。この詩は詩話総亀巻十四、錦繡萬花谷巻三・冬・詩、詩人玉屑巻二十・禅林、古今合璧事類備要前集巻十四・時令門・冬・猿啼など多数の書に見られる。9の「花開紅樹乱」は五言詩に同じ句を見出せないが、徐元杰の七絶「湖上」（楳埜集巻一二）の「花開紅樹乱鶯啼、草長平湖白鷺飛、風物晴和人意好、夕陽簫鼓幾船歸、」の、第一句の下二字を除いたと考えられる。乱は鶯に懸かるので、句題の設定は不適当であるが、やはり千家詩選巻一五・地理門・湖に収められている点からも、これを出典として認定した。和歌では、春秋とも花が咲くのに「色が乱れる」と形容する表現は常套で、この句題百首でも「花の色にみだれにけりなさほ姫のしのぶにかあらぬ春の衣手」（一花抄・四一・頓阿）などと違和感なく詠んだようである。

(10) **88**は「天色は情無く淡し」と訓むことになる。原詩は千家詩選巻十五・地理門「江景」に入り、仮名注によってみると、「無情淡トハ自然ニ淡泊ノ天ト（ナ）レル也、此風流千古生（シ）ニ人ノ愁ヲ来ル、今ニ又留テ成ト後人ノ興ヲ也、愁ノ字必シモ憂患等ノ義ニハアラス、只是興ノ感（スル）ニ人ノ情ヲ謂也、山愁雲愁（ヘ）ナント申、常事也（フ）」とあり明解である。ただ、歌人によっては「情談無し」と解していた可能性もある（一花抄四三六～四〇）。頓阿は「心なきむなしき空をかこつかな人はあはれといはぬ余りに」、良春は「いにしへに心をとめて言とへばみどりの空はいふかひもなし」と詠むが、「いはぬ」「いふ」の語の使用は題字の「談」を満たすためと取れなくもない。

(11) 注2前掲の稲田著書・齋藤論攷でともに問題としている。

(12) 芳村弘道『唐代詩人と文獻研究』（中國藝文研究会、二〇〇七年）第三部第五章「本邦傳来の宋版『錦繡萬花谷』」（初出一九九六年）参照。

(13) 注2前掲稲田著書。

(14) 注1前掲小山論攷a。

(15) 李更・陳新校證『分門纂類唐宋時賢千家詩選校證』（人民文學出版社、二〇〇二年）、住吉朋彦「『千家詩選』と『新選集』―国清寺旧蔵本をめぐって」（斯道文庫論集45、二〇一一年二月）。金程宇「《分門纂類唐宋時賢千家詩選》新探―以兩種稀見日藏本為中心」（中國典籍與文化73　二〇一〇年五月）。また官版は和刻本漢詩集成総集篇9に、三十巻本は劉玉才・住吉朋彦編『分門纂類唐宋時賢千家詩選　合璧影印中日分蔵珍本』（北京大學出版社、二〇一四年）にそれぞれ景印が収録される。

(16) 東院毎日雑々記応永三年（一三九六）三月二日条に「千家詩終功了」と寺内での読書が見え、また一条兼良の尺素往来に「為小童稽古、本書大要候」として、「千家ノ詩」を挙げるが、ともに千家詩選であろう。

(17) 列挙すれば、銭起（39・63）、白居易（14・89）、権徳輿（51・54・57）、温庭筠（35・43）、寇準（28・93）、李成季（12・24・76）、潘牓（3・86）（38・98）（16・61）、戴復古（13・45・91）（65・74）（69・87）となる。儲泳の詩からも72と97を採った可能性があること注6参照。

(18) 張宏生『江湖詩派研究』（中華書局、一九九五年）、内山精也「宋末元初の文學言語―晩唐體の行方」（日本中国学会報64　二〇一二年）参照。また内山精也編『アジア遊学180　南宋江湖の詩人たち　中国近世文学の夜明け』（勉誠出版、二〇一五年）は、さまざまな角度から江湖派詩人の活動を位置づけている。

(19) 句題百首が源泉とした戴復古の詩には千家詩選には見えず、その別集である石屏詩集・石屏続集に載せるものもある。戴復古晩年には陳起の手で、書棚本の石屏続集と長短句とが刊行されている。ただ書棚本が同時代の本邦に将来されていたかどうかはまだ明証が見出せないという。内山精也「南宋江湖詩人研究の現在地」（注18前掲内山編著）、内山・王嵐「江湖詩人の詩集ができるまで―許棐と戴復古を例として」（同上）参照。

(20) 良基の場合、詩人玉屑より影響を受け、とくに巻一所収の厳羽（滄浪）の詩話に傾倒すること甚だしかったことは、延文三年（一三五八）七月上旬に執筆した連歌論書撃蒙句法にはっきり看取できる。ここで厳羽は江西派・江湖派を攻撃し、とくに晩唐詩を末流低回のものとして批判した。いっぽう良基がしきりに晩唐詩を称讃し、三体詩を愛読した。こうした氷炭相容れぬ受容が現実であった。増田欣「二条良基の連歌論における蘇黄尊重と晩唐詩尊重の矛盾について」（中世文藝6、一九五五年七月）参照。

(21) 注2井上著書、五七頁。

(22) 張宏生（翻訳保苅佳昭）「南宋江湖詩人の生活と文学」（注18前掲内山編著）参照。

表2　句題百首の句題と原詩一覧

（凡例）

※番号・部立・句題、原詩の作者・詩体・全文・所収文献の順に掲げた。

※番号順に排列した。

※原詩の全文は、原則詩人の別集の本文を掲げ、しからざる場合は成立の古い文献のそれを掲げた。

※所収文献は詩人の別集のほか、頓阿が眼にした可能性のある、唐詩ないし宋詩を対象とした詩選・詩話・類書を中心に調査した。適宜略称を用いた。

（例）

瀛奎律髓　→律髓。錦繡萬花谷　→錦繡。古今合璧事類備要　→事類。三体詩　→三体。詩人玉屑　→玉屑。苕渓漁隠叢話　→叢話。詩話総亀　→総亀。唐詩紀事　→紀事。唐百家詩選　→百家。白氏文集　→白氏。萬首唐人絶句　→萬首。文苑英華　→英華。分門纂類唐宋時賢千家詩選　→千家

※所収文献は詩人別集が伝存する場合最初に、以下は各種文献を刊行年順に掲げ、番号を冠した。また句題となった詩句について所収文献の間で異同がある場合はこれを注した。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
遥峰帯晩霞	残雪更粘枝	春浅霜連夜	梅残数点雪	清月上梅花	柳問黄鳥路	春江浪拍空	春深花始開	花開紅樹乱	花発多風雨	坐久落花多	花落木猶香	頽檐掛古藤	歳時春猶少
劉克莊	林摛	潘牓	王安石	恵洪（徳洪）	蔡肇	秦観	周端臣	徐元杰	于武陵	王維	李成季	戴復古	白居易
五律	五絶	五律	五絶	七律	五？	五絶	五律	七絶	五絶	五律	五絶	五律	五律
暝色千村静、**遥峯帯浅(②晩)霞**、荷鋤帰別墅、乞火到鄰家、踈鼓聞更遠、昏燈見字斜、小窓風露冷、自起灌蘭花、	蠟蟻梅猶糝、春盤菜已絲、條風初被木、**残雪更粘枝**、急櫓鳴鵝鸛、喧灘聞鼓鼙、風隨山曲折、船與浪高低、**春浅霜連夜**、天隨月半渓、嵯峨如許石、直欠一鐫題、	日浄山如染、風暄草欲薫、**梅残数点雪**、麥漲一渓雲、	上元独宿寒巖寺、臥看籌燈映薄紗、夜久雪猿啼嶽頂、夢回**清月在(②③④⑤上)梅花**、十分春瘦緣何事、一掬帰心未到家、卻憶少年行楽処、軟紅香霧噴京華、	**柳問黄鳥路**、波底白鷗天、	暁浦煙籠樹、**春江浪拍空**、煩君添小艇、畫我作漁翁、	畝倒幾株梅、黏枝半是苔、相伝前代種、曾歴太平来、山冷雪猶在、**春深花始開**、乱離無酒買、嚼蘂當銜杯、	**花開紅樹乱**鶯啼、草長平湖白鷺飛、風物晴和人意好、夕陽簫鼓幾船帰、	勧君金屈巵、満酌不須辞、**花発多風雨**、人生足別離、	楊子談經所、淮王載酒過、興闌啼鳥換、**坐久落花多**、逕転廻銀燭、林開散玉珂、巌城時未啓、前路擁笙歌、	日出斂蒼靄、雨余生晩涼、鳥啼人不見、**花落樹猶香**、地僻人稀到、山寒水欲氷、聞鐘知有寺、見犬不逢僧、断壟森喬木、**頽簷掛古藤**、斜陽照孤影、詩骨瘦崚嶒、	花尽頭新白、登樓意若何、**歳時春日少**、世界苦人多、愁醉非因酒、悲吟不是歌、求師治此病、唯勧読楞伽、
①千家巻3節候門・立春 ①千家巻15地理門・江景	①臨川集巻26「題齊安壁」、②叢話前集巻35、③玉屑巻17・西崐体	①石門文字禅巻10「上元宿百丈」、②総亀巻11、③錦繡巻3・冬・詩、④玉屑巻20・禅林、⑤事類前集巻14・時令門・冬・猿啼	①叢話前集巻37、②玉屑巻3・宋朝警句	①淮海集巻11「題趙團練畫江干曉景」、②千家巻15地理門・舟	①江湖後集巻3・周端臣「真州梅」、②千家巻7百花門・梅花	①楳埜集巻12「湖上」、②千家巻15地理門・湖	①萬首巻13「勧酒」、②紀事巻63、③千家巻25性適門・離別	①王右丞相詩集巻7「従岐王過楊氏別業応教」、②総亀巻5、③錦繡前集巻3・春・詩、④英華巻179、⑤紀事巻29、⑥玉屑巻4・風騒句法	①千家巻14地理門・山 ①石屏詩集巻4「山中少憩」、②江湖小集巻80・石屏続集、③千家巻14地理門・山	①白氏文集巻16「晩春登大雲寺南樓、贈常禅師」、②英華巻221、③律髓巻47・釈梵類	①後村居士詩巻3「暝色」、②千家巻6昼夜門・夜、③律髓巻15

15	春	春尽鳥声中	李昌符	五律	酒醒郷関遠、迢迢聽漏終、曙分林影外、**春尽雨(②鳥)声中**、鳥思江村路、花殘野岸風、十年成底事、羸馬倦西東、	①紀事巻70「傷春」、②玉屑巻3・宋朝警句（作者蔡懋）、③三体巻3、④律髓巻29・旅況類
16	夏	深谷夏聞鶯	潘牭	五律	纔登西嶺路、詩思便能清、棧道雲間沒、籃輿壁上行、遥山時見虎、**深谷夏聞鶯**、咫尺名山寺、猶分両日程、	①千家巻14地理門・山
17	夏	緑樹連村暗	司空圖	五絶	**緑樹連村暗**、黄花出陌稀、遠陂春草緑、猶有水禽飛、	①司空表聖詩集巻2「独望」、②叢話前集巻6、③総亀巻8、④錦繡前集巻3・夏・詩、⑤萬首巻18、⑥英華巻681、⑦玉屑巻6・命意・委曲、⑧事類前集巻13時令門・孟夏・黄麦
18	夏	山雲夏亦繁	鮑当	五絶	湖水春来緑、**山雲夏亦繁**、何如隠君子、長嘯掩柴門、	①千家巻21人品門・隠逸
19	夏	松風五月寒	李白	五律	聞説金華渡、東連五百灘、全勝若耶好、莫道此行難、猿嘯千谿合、**松風五月寒**、他年一攜手、搖艇入新安、	①分類補註李太白集巻9「見京兆韋参軍量移東陽二首其二」、②錦繡前集巻3・秋・詩
20	夏	風樹鳴蟬咽	韓維	五律	約略横雲島、欄干瞰玉淵、雨汀翹睡鷺、**風樹咽嘶(②鳴)蟬**、緑髪莓苔地、紅衣菡萏天、夜深三弄笛、月在釣魚船、	①南陽集巻7「水閣」、②錦繡前集巻3・秋・詩
21	夏	秋声帯雨荷	白居易	五排	霜紅二林葉、風白九江波、暝色投煙鳥、**秋声帯雨荷**、馬閑無処出、門冷少人過、鹵莽還郷夢、依稀望闕歌、共思除醉外、無計奈愁何、試問陶家酒、新篘得幾多、	①白氏文集巻17「潯陽秋懐贈許明府」、②錦繡前集巻3・秋・詩、③事類前集巻14時令門・秋・晩景
22	夏	扇罷風生竹	李商隠	五？	**罷扇風生竹**、移床月過庭、	①錦繡前集巻3・夏・詩、②玉屑巻4・風騒句法、③事類前集巻13・時令門・夏・移床
23	夏	泉声到池尽	張祜	五律	旧人宅何在、空門客自過、**泉声到池尽**、月色上樓多、小洞生針竹、重堦夾細莎、殷勤望城市、雲水暮鍾和、	①張承吉文集巻3「題惠山寺」、②叢話前集巻36、③百家巻15、④英華巻238、⑤紀事巻57、⑥玉屑巻4・風騒句法、⑦三体巻3、⑧事類前集巻49・釈教門・仏寺・東山寺、⑨瀛奎律髓巻47・釈梵類
24	夏	雨余生晩涼	李成季	五絶	日出斂蒼靄、**雨余生晩涼**、鳥啼人不見、花落樹猶香、	①千家巻14地理門・山
25	夏	蛍入定僧衣	劉得仁	五律	禅寂無塵地、焚香話所帰、樹搖幽鳥夢、**蛍入定僧衣**、破月斜天半、高河下露微、翻令嫌白日、動即與心違、	①英華巻237「宿僧院」、②三体巻3、③律髓巻47・釈梵類

26	秋	露気早知秋	李昉	五？	水光先見月、**露気早知秋**、	①総亀巻12、②錦繡前集巻3・秋・詩
27	秋	一雨洗残暑	陳甫	五？	**一雨洗残暑**、萬家生早涼	①総亀巻14、②錦繡前集巻3・秋・詩
28	秋	野色混秋光	寇準	五律	蕭蕭古原上、景物感離腸、遠嶠収残雨、寒林帯夕陽、渓声迷竹韻、**野色混秋光**、吟罷還西望、平沙起雁行、	①忠愍公詩集巻中「秋日原上」、②錦繡前集巻3・秋・詩、③事類前集巻14・時令門・秋・秋霽
29	秋	天高一雁横	呉幵	五？	木落千山痩、**天高一雁横**、	①錦繡前集巻3・秋・詩、②事類前集巻14・時令門・秋・過雁
30	秋	終夜著蛬声	宋祁	五絶	倦枕回尤数、東方不肯明、只将無睡耳、**終夜著蛩声**、	①景文集巻22「秋夕不寐」、②千家巻25性適門・睡
31	秋	稲花千頃浪	華岳（子西）	五律	疎雨洗空碧、晩晴人倚樓、**稲花千頃浪**、楓葉一簾秋、遠岸明残日、孤村認小舟、渓山如愛我、相見亦回頭、	①翠微南征録巻8「登樓晩望〈次宋帥幾韻〉」、②千家巻25性適門・眺望
32	秋	江声入秋寺	雍陶	五？	**江声秋入寺**、雨気夜侵樓、	①総亀巻3、②錦繡前集巻3・秋・詩、③紀事巻56、④玉屑巻4・風騒句法
33	秋	月色一窓虚	梵崇	五？	秋声万壑満、**月色一窓虚**、	①錦繡前集巻3・秋・詩、②事類前集巻14・時令門・秋・山景
34	秋	江清月近人	孟浩然	五絶	移舟泊烟渚、日暮客愁新、野曠天低樹、**江清月近人**、	①孟浩然集巻4「宿建徳江」、②叢話後集巻16、③百家巻1、④萬首巻4、⑤英華巻291、⑥紀事巻23、⑦玉屑巻4・風騒句法
35	秋	鶏声茆店月	温庭筠	五律	晨起動征鐸、客行悲故郷、**雞声茅店月**、人迹板橋霜、槲葉落山路、枳花明駅牆、因思杜陵夢、鳧雁満迴塘、	①温庭筠詩集巻7「商山早行」、②叢話前集巻19、③総亀巻6、④錦繡前集巻3・秋・詩、⑤英華巻294、⑥玉屑巻3・唐人句法・羈旅、⑦三体巻3、⑧事類続集巻45・事為門・行旅、⑨律髄巻14・晨朝類
36	秋	山暁月初上	張軫	五律	夜帆時未発、同侶暗相催、**山暁月初下（②上）**、江鳴潮欲来、稍分揚子岸、不弁越王台、自客水郷裏、舟行知幾迴、	①英華巻291「舟行早発」、②錦繡前集巻3・秋・詩
37	秋	月向白波沈	方干	五律	寒山壓鏡心、此処是家林、梁燕窺春醉、巖猿學夜吟、雲連平地起、**月向白波沈**、猶自聞鐘角、棲身可在深、	①玄英集巻1「鏡中別業二首　其一」、②総亀巻10、③錦繡後集巻21・隠逸・詩、④紀事巻63
38	秋	遠山青入霧	潘牥	五律	出郭忽数里、雨余秋意偏、**遠山青入霧**、野水白平田、鷺立斜陽去、牛依古樹眠、不辞泥濘極、即此是豊年、	①千家巻14地理門・郊野

39	秋	風便数砧声	錢起	五絶	斗転月未落、舟行夜已深、有村知不遠、**風便数声砧**(③**送数砧声**)、	①錢考功集巻9「江行無題一百首　其二十八」、②萬首巻5、③千家巻15地理門・舟
40	秋	新霜染楓葉	楊徽之	五？	**新霜染楓葉**、皓月借蘆花、	①総亀巻12、②錦繡前集巻3・秋・詩、③玉屑巻3・宋朝警句
41	冬	落葉無行路	佚名	五絶	去去穿白雲、**落葉無行路**、但聞丁丁声、知是束薪処、	①千家巻22人品門・樵夫
42	冬	木落見他山	鄭谷	五律	漠漠江天外、登臨返照間、潮来無別浦、**木落見他山**、沙鳥晴飛遠、漁人夜唱閑、歳窮帰未得、心逐片帆還、	①雲臺編巻上「登杭州城」、②錦繡前集巻3・秋・詩、③紀事巻70
43	冬	人跡板橋霜	温庭筠	五律	晨起動征鐸、客行悲故郷、雞声茅店月、**人迹板橋霜**、槲葉落山路、枳花明駅牆、因思杜陵夢、鳧雁満迴塘、	①温庭筠詩集巻7「商山早行」、②叢話前集巻19、③総亀巻6、④錦繡前集巻3・秋・詩、⑤英華巻294、⑥玉屑巻3・唐人句法・羈旅、⑦三体巻3、⑧事類続集巻45・事為門・行旅、⑨律髓巻14・晨朝類
44	冬	破林霜後月	林逋	五律	帰路過東關、行行一錫間、**破林霜後月**、孤寺水辺山、頂笠衝残葉、腰装歇暮湾、香燈旧吟社、清思逐師還、	①林和靖集巻1「和朱仲方送然社師無為還歴陽」、②錦繡前集巻3・秋・詩、③事類前集巻14・時令門・秋・雑詠
45	冬	山寒水欲氷	戴復古	五律	地僻人稀到、**山寒水欲氷**、聞鐘知有寺、見犬不逢僧、断壟森喬木、頽簷掛古藤、斜陽照孤影、詩骨瘦崚嶒	①石屏詩集巻4「山中少憩」、②江湖小集巻80・石屏続集、③千家巻14地理門・山
46	冬	一鳥過寒水	趙師秀	五律	開扉在石層、尽日少人登、**一鳥過寒木**、数花揺翠藤、茗煎冰下水、香炷佛前燈、吾亦逃名者、何因似此僧、	①清苑齋詩集「巖居僧」、②宋藝圃集巻18、③千家巻22人品門・僧、④律髓巻47・釈梵類
47	冬	清晨雪擁門	李廌	五絶	紙窓明晃晃、雲日暗暾暾、半夜寒添被、**清晨雪擁門**、	①済南集巻4「雪」、②千家巻13天文門・雪
48	冬	晴雪落長松	杜甫	五律	蘭若山高処、煙霞嶂幾重、凍泉依細石、**晴雪落長松**、問法看詩妄、観身向酒慵、未能割妻子、卜宅近前峰、	①集千家註杜工部詩集巻16「謁真諦寺禪師」、②玉屑巻4・風騒句法、③律髓巻43・遷謫類
49	冬	独釣寒江雪	柳宗元	五絶	千山鳥飛絶、萬逕人蹤滅、孤舟蓑笠翁、**独釣寒江雪**、	①柳河東集巻43・古今詩「江雪」、②叢話前集巻19、③錦繡後集巻2・雪・詩、④萬首巻2、⑤紀事巻43、⑥玉屑巻15・柳儀曹
50	冬	流年川暗度	崔塗	五律	秋風吹故城、城下独吟行、高樹鳥已息、古原人尚耕、**流年川暗度**、往事月空明、不復歎岐路、馬前塵夜生、	①百家巻17「夕次洛陽道中」、②英華巻295、③玉屑巻4・風騒句法、④律髓巻15・暮夜類

51	恋	心知人不知	権徳輿	五絶	空閨滅燭後、羅幌独眠時、涙尽腸欲断、**心知人不知**、	①権文公集巻9「玉臺體」、②萬首巻10、③千家（明鈔本附載）巻門不明・閨怨
52	恋	唯有涙痕多	徐積	五絶	已写共姜誓、仍題督護歌、更無脂粉汚、**唯有涙痕多**、	①節孝集巻22「題扇十首　孀婦扇」、②千家巻17器用門・扇
53	恋	三年不見書	白居易	五古	心亦無所迫、身亦無所拘、何為腸中気、鬱鬱不得舒、不舒良有以、同心久離居、五年不見面、**三年不得書**、念此令人老、抱膝坐長吁、豈無盈尊酒、非君誰與娯、	①白氏文集巻2「続古詩十首　其八」
54	恋	涙尽腸欲断	権徳輿	五絶	空閨滅燭後、羅幌独眠時、**涙尽腸欲断**、心知人不知、	①権文公集巻9「玉臺體」、②萬首巻10、③千家（明鈔本附載）巻門不明・閨怨
55	恋	入夢到如今	杜牧	五絶	終日求人卜、迴迴道好音、那時離別後、**入夢到如今**、	①樊川文集巻20「寄遠人」、②萬首巻14、③千家巻25性適門・離別
56	恋	花開更憶君	趙汝唫	五律	離歌休再畳、我亦不堪聞、山接詩愁去、雲隨別袂分、官閑寧問禄、命薄謾能文、悵望梅辺屋、**花開更憶君**、	①千家巻25性適門・離別
57	恋	空閨残燭夜	権徳輿	五絶	**空閨滅燭後**（②③**夜**）、羅幌独眠時、涙尽腸欲断、心知人不知、	①権文公集巻9「玉臺體」、②萬首巻10、③千家（明鈔本附載）巻門不明・閨怨
58	恋	恨別鳥驚心	杜甫	五律	国破山河在、城春草木深、感時花濺涙、**恨別鳥驚心**、烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪、	①集千家註杜工部詩集巻3「春望」、②玉屑巻4・風騒句法、③律髓巻32・忠憤類
59	恋	別後会難期	沈廷瑞	五律	名山相別後、**別後会難期**、金鼎銷紅日、丹田老紫芝、訪君雖有路、懐我豈無詩、休羨繁華事、百年能幾時、	①総亀巻16、②千家巻21人品門・神仙
60	恋	何処更相逢	于武陵	五律	白日去難駐、故人非旧容、今宵一別後、**何処更相逢**、過楚水千里、到秦山幾重、語来天又曉、月落満城鐘、	①百家巻9「夜與故人別」、②英華巻288、③玉屑巻3・唐人句法・自然、④事類続集巻46・事為門・別離・山萬重
61	旅	棧路雲間没	潘牟	五律	纔登西嶺路、詩思便能清、**棧道雲間没**、籃輿壁上行、遥山時見虎、深谷夏聞鶯、咫尺名山寺、猶分兩日程、	①千家巻14地理門・山
62	旅	江辺問船子	許景衡	五絶	**江辺問舟子**、潮落幾時回、野店無燈火、還須明月来、	①千家巻15地理門・江
63	旅	船行夜已深	錢起	五絶	斗転月未落、**舟行夜已深**、有村知不遠、風便数声砧、	①錢考功集巻9「江行無題一百首　其二十八」、②萬首巻5、③千家巻15地理門・舟

64	旅	棹入黄蘆浦	戴復古	五律	**棹入黄蘆浦**、驚飛白鷺群、霜華濃似雪、水気盛於雲、市遠炭増價、天寒酒策勲、同舟有佳士、擁被共論文、	①石屏詩集巻4「冬日移舟入峡避風」、②千家巻15地理門・舟 ①石屏詩集巻2「贈郭道人〈詩句皆述其所言〉」	65	旅	蒼苔満山径	戴復古	五律	滅性能安樂、深居絶是非、英雄行險道、富貴隠危機、紙被如綿軟、藜羹勝肉肥、**蒼苔満山径**、最喜客来稀、	①千家巻15地理門・舟	66	旅	郷信寄胡雁	呉公敏（公懋）	五律	潭影静沈沈、維舟傍竹林、**郷心寄孤雁**、寒信起疎砧、犬吠人家近、燈明樹影侵、客愁元不寐、夜雨更蛩吟、	①蔵海居士集巻下「野歩」、②千家巻14地理門・郊野
67	旅	人行秋色中	呉可	五絶	密竹蔵啼鳥、荒村起白煙、**人行秋色裏**、家在夕陽辺、		68	旅	路明残月在	王観	五律	雞唱催人起、又生前去愁、**路明残月在**、山露宿雲收、村店煙火動、漁家燈燭幽、趨名與趨利、行役幾時休、	①紀事巻50「早行」、②玉屑巻4・風騒句法	69	旅	灘声入夢寒	戴復古	五律	艤棹西巖下、舟人語夜闌、風林無鳥宿、石窟有龍蟠、月色連沙白、**灘声入夢寒**、曉来新得句、寄與故人看、	①石屏詩集巻4「光澤渓上」、②千家巻15地理門・渓
70	旅	客愁双鬢覚	林撝	五絶	歳與梅花晩、春先爆竹鳴、**客愁雙鬢覚**、時事寸心駕、	①千家巻3節候門・立春	71	閑居	幽居有余楽	戴復古	五律	茅屋七五聚、沙汀八九磐、梯山畦麥秀、嚢石障渓湍、父老鶏豚社、兒童梨栗盤、**幽居有余楽**、奔走愧儒冠、	①石屏詩集巻2「山中即目（一作事）二首其二」、②千家巻14地理門・山	72	閑居	尽日掩柴扉	陸游	五律	羲農去不反、釈老似而非、太息衆皆醉、逝将誰與帰、經時忘肉味、**尽日掩柴扉**、安得同心者、燈前語造微、	①劍南詩稾33「羲農」
73	閑居	秋月離喧見	賈島	五律	去有巡臺侶、荒渓衆樹分、瓶残秦地水、錫入晉山雲、**秋月離喧見**、寒泉出定聞、人間臨欲別、旬日雨紛紛、	①長江集巻7「送惟一遊清涼寺」、②百家巻15、③錦繡後集巻28・僧・詩、④事類前集巻49・釈教門・僧・入定 ①石屏詩集巻2「贈郭道人〈詩句皆述其所言〉」	74	閑居	深居絶是非	戴復古	五律	滅性能安樂、**深居絶是非**、英雄行險道、富貴隠危機、紙被如綿軟、藜羹勝肉肥、蒼苔満山径、最喜客来稀、	①叢話前集巻42、②総亀巻13、③千家巻21人品門・隠逸	75	閑居	山中無暦日	太上隠者	五絶	偶来松樹下、高枕石頭眠、**山中無暦日**、寒尽不知年、	
76	閑居	鳥啼人不見	李成季	五絶	日出斂蒼靄、雨余生晩涼、**鳥啼人不見**、花落樹猶香、	①千家巻14地理門・山	77	閑居	残生隨白鷗	杜甫	五律	五載客蜀郡、一年居梓州、如何関塞阻、転作瀟湘游、萬事已黄髪、**残生隨白鷗**、安危大臣在、何必涙長流、	①集千家註杜工部詩集巻12「去蜀」、②錦繡後集巻16・行旅、③玉屑巻4・風騒句法											

78	閑居	閉門留野鹿	王建	五律	屋在瀑泉西、茅簷下有渓、**閉門留野鹿**、分食養山雞、桂熟長收子、蘭生不作畦、初開洞中路、深処転松梯、	①王司馬集巻3「山居」、②叢話後集巻14、③百家巻13、④玉屑巻16・山居詩、⑤千家巻14地理門・山、⑥律髄巻23・閑適類
79	閑居	身在能無事	方干	五律	世人如不容、吾自縱天慵、落葉憑風掃、香秔倩水舂、花朝連郭霧、雪夜隔湖鐘、**身外(③④在)無能事**、頭宜白此峰、	①玄英集巻1「鏡中別業二首　其二」、②総亀巻10、③錦繡後集巻21・隠逸・詩、④紀事巻63、⑤律髄巻23・閑適類
80	閑居	竹径通幽処	常建	五律	清晨入古寺、初日照高林、**竹逕通幽処**、禅房花木深、山光悦鳥性、潭影空人心、萬籟此都寂、但余鐘磬音、	①常建詩巻3「題破山寺後禅院」、②百家巻4、③叢話前集巻20、④総亀巻7、⑤錦繡後集巻28・寺院・詩、⑥英華巻234、⑦紀事巻31、⑧玉屑巻3・唐人句法・幽野、⑨三体巻3、⑩事類前集巻49釈教門・仏寺・破山寺
81	雑	半山無夕陽	陳摶	五律	為愛西峰好、吟頭尽日昂、岩花紅作陣、渓水緑成行、幾夜礙新月、**半山無夕陽**、寄言嘉遁客、此処是仙郷、	①総亀巻16「西峰」、②玉屑巻20・方外・希夷先生、③千家巻14地理門・山
82	雑	鐘声雲外残	厳羽	五律	独尋青蓮宇、行過白沙灘、一径入松雪、数峰生暮寒、山僧喜客至、林閣借人看、吟罷拂衣去、**鐘声雲外残**、	①滄浪厳先生吟巻巻2「訪益上人蘭若」、②千家巻16宮室門・寺
83	雑	水窮天尽頭	趙希逢	五律	遠山寒暮景、無事試登樓、泛渚鷗終日、書空鴈迎秋、朱簾高巻雨、雨渡自横舟、望極到何許、**水窮天尽頭**、	①千家巻25性適門・眺望
84	雑	流水浸雲根	戴復古	五律	道傍誰氏舘、借我坐開樽、翁嫗出迎客、兒童為掃門、好花生竹所、**流水浸雲根**、儻遂卜隣約、為農老此村、	①石屏詩集巻5「道傍館」、②千家巻16宮室門・館舎
85	雑	山光落釣舟	郭忠謨	五律	鑿破青山骨、初営数畝丘、泉分幽竇乳、峽束大江流、漁唱来花径、**山光落釣舟**、沙鷗驚笑語、片片起滄洲、	①千家巻15地理門・渓
86	雑	船與浪高低	潘牓	五律	急櫓鳴鵝鸛、喧灘鬧鼓聲、風隨山曲折、**船與浪高低**、春浅霜連夜、天隨月半渓、嵯峨如許石、直欠一鐫題、	①千家巻15地理門・江景
87	雑	風林無宿鳥	戴復古	五律	艤棹西巖下、舟人語夜闌、**風林無鳥宿**、石窟有龍蟠、月色連沙白、灘声入夢寒、曉来新得句、寄與故人看、	①石屏詩集巻4「光澤渓上」、②千家巻15地理門・渓
88	雑	天色無情談	范成大	五絶	**天色無情淡**、江声不断流、古人愁不尽、留與後人愁、	①石湖居士詩集巻3「江上」、②千家巻15地理門・江景

89	雑	人間苦人多	白居易	五律	花尽頭新白、登楼意若何、歳時春日少、**世界苦人多**、愁醉非因酒、悲吟不是歌、求師治此病、唯勧読楞伽	①白氏文集巻16「晩春登大雲寺南楼、贈常禅師」、②英華巻221、③律髄巻47・釈梵類
90	雑	世路山河嶮	劉禹錫	五絶	**世路山河嶮**、君門煙霧深、年年上高処、未省不傷心、	①劉賓客外集巻8「九日登高」、②萬首巻2、③千家巻4節候門・重陽
91	雑	清渓照孤影	戴復古	五律	地僻人稀到、山寒水欲氷、聞鐘知有寺、見犬不逢僧、断壟森喬木、頽簷掛古藤、**斜陽(③清渓)照孤影**、詩骨瘦峻嶒	①石屏詩集巻4「山中少憩」、②江湖小集巻8・石屏続集、③千家巻14地理門・山
92	雑	松多寺不見	戴復古	五絶	借問開山祖、都栽幾万松、**松多不見寺**、人世但聞鐘、	①千家巻16宮室門・寺
93	雑	遠嶠収残雨	寇準	五律	蕭蕭古原上、景物感離腸、**遠嶠收残雨**、寒林帯夕陽、渓声迷竹韻、野色混秋光、吟罷還西望、平沙起雁行、	①忠愍公詩集巻中「秋日原上」、②錦繡前集巻3・秋・詩、③事類前集巻14・時令門・秋・雑詠
94	雑	落日沈沙頭	不明	五？	不明	不明
95	雑	清風隔世塵	戴復古	五律	道者日高臥、**清風隔世塵**、鳳麟不可見、猿鳥自相親、山木輪囷古、茶花冷淡春、草荒門外路、常怕有来人、	①石屏詩集巻5「同安子順訪茅庵道人、鳳凰麒麟不可見道人語也」
96	雑	衰鬢臨朝鏡	李益	五絶	**衰鬢臨照(②朝臨)鏡**、将看却自疑、慙君明似月、照我白如絲、	①萬首巻11「照鏡」、②千家巻17器用門・鏡
97	雑	瀑近夜疑雨	儲泳	五律	尽日掩柴門、何人得見君、只因喧寂異、似有聖凡分、**瀑近夜疑雨**、山深晴亦雲、伝聞九霄翮、落羽正紛紛、	①千家巻21人品門・隠逸
98	雑	鷺立斜陽去	潘牓	五律	出郭忽数里、雨余秋意偏、遠山青入霧、野水白平田、**鷺立斜陽去**、牛依古樹眠、不辞泥濘極、即此是豊年、	①千家巻14地理門・郊野
99	雑	山田級級高	戴復古	五律	長舟不用柂、沙上木為篙、渓路湾環転、灘声日夜号、居人不覺險、行客始知勞、四望無平地、**山田級級高**、	①中興群公吟稿(陳起編)戊集巻2「南劍渓上」、②千家巻15地理門・渓
100	雑	僧談悟色空	徐照	五律	古殿清燈冷、虚堂葉掃風、掩關人迹外、得句佛香中、鶴睡応無夢、**僧談必悟空**、坐驚窓欲曉、片月在林東、	①芳蘭軒集「宿寺」、②千家巻16宮室門・寺